

2015. 7. 14 (火)

人々の死とその記憶

荻野昌弘

今年から初めてチャペルに出ている皆さんも多いと思うのですが、どうでしたか。どうやら、他学部のチャペルでは賛美歌を歌う学生があまりいないようですが、社会学部に限ってはかなり多くの方が歌っているのではないかと思います。これは、非常にいいことだと思います。

春学期の後半では「真理と出会う」がテーマでしたが、春学期最後のチャペルである今朝、聖書で読まれた箇所は「イエスの死」についてです。死は、真理とどのように関わっているのか、私がこの春学期の中で経験したことから、この問題について少しお話したいと思います。

現代社会と葬儀

学部長という職は、いろいろなことをしなければならなくて、その中に、葬儀への参列があります。社会学部で長い間先生をされていて、その後、定年を迎えると名誉教授になります。名誉教授の方が亡くなられたときに、学部長が葬儀に参列します。皆さんは、葬儀に出る機会はそれほどないと思うのですが、春学期になってから私は合計4回葬儀に参列したのですが、そのうちの2回は名誉教授の先生のご不幸があったからでした。

もう1回は同僚のお父さまが亡くなられたので、それで葬儀に出席しました。

今は、葬儀のありかたというもだいぶ変わってきていて、葬儀屋さんが基本的に仕切ります。一番驚いたのは、4回のうちの1回の葬式で、もともと日本の葬式では棺を男性が担いでいくのが普通なのですが、最近担ぐ人があまりいないのかどうか分かりませんが、かなりオートメーション化されていて、棺を運ぶ台車が、葬儀場に遠隔操作でやって来ます。そして自動的に棺がその上に乗せられ、霊柩車まで運ばれます。その間、人間の手が煩わされることはありません。このように、葬儀のオートメーション化が進んでいて、非常に驚きました。

ただ、一方で、4回のうちの2回は教会での葬儀だったのですが、教会の葬儀というのはこれとはだいぶ違って、どこが違うかというと、プロテスタント教会では牧師さんが葬儀をつかさどります。普通の葬儀場での葬式は、司会の人がいるいろいろなアナウンスをしたりして基本的には葬儀屋が仕切るわけですが、教会の場合は、牧師さんが司会をして最初から最後まで葬儀をつかさどる伝統を維持しています。これは、単純に個人的な好みですけども、私は教会の葬式のほうがいいなと思いました。

死者と出会う

4回のうち1回は、私が生前一度もお会いしたことがない方の葬儀でした。これは、あまりないことですね。通常は家族に不幸があって、あるいは、もともと生前に懇意にしていた方が亡くなったり、あるいは友人が亡くなったり、そのようなときに葬儀に出るわけですが、自分が知らなかった方の葬儀に出るということは、そうめったにあるものではありません。

それは、今年は特別研究期間中ですが、本来であればこのチャペルを毎年守っておられる社会学部宗教主事の打樋先生のお父さまの葬儀でした。私は打樋先生のお父さまに会ったことが一度もなく、その葬儀に参列して初めて、お父さまの存在を、ある意味で知ることになったわけです。葬儀では牧師さんが、打樋先生のお父さまがどのような方であったかということについて紹介をされます。その後に友人の皆さん方が、生前どのような方であったかをいろいろ語っていきます。ですから、私は、打樋先生のお父さまのことを生前には一度も知らなかったのですが、その葬儀の場で初めてお父さまのことを知ることになるわけです。これは、自分としては、非常に不思議な体験でした。

というのも、牧師さんや友人の皆さん、それから打樋先生がお父さまのことを話すうちに、一度も会ったことがないのに、そのお父さまのイメージがだんだん沸いてきたからです。例えば、尼崎でかまぼこ屋さんの家に生まれて、中学校2年生の時にキリスト教に入信します。どのような理由であったかということは説明されていませんでした。その後ずっとかまぼこ屋さんを営んでいて、お店を

閉めてからその後は、教会の活動に専念するという人生でした。それで、友人の皆さんは、異口同音に「いつも人を笑わすことが好きで、冗談ばかり言っている、そのような方だった」ということを語るわけです。その後、打樋先生が遺族の代表として挨拶をします。これはどのような葬儀においても、されるわけですが、その時に打樋先生は「うちの父は本当に人を笑わすことが好きで、人を笑わせることに命をかけていた」と言われました。実際、がんで入院していて命がもう長くないというときでも、常に人を笑わそうとしていました。例えば、看護師さんが入ってくると「ああ、胸が痛い」と言う。これは要するに、看護師さんが女性なので、自分は胸が痛いということを書いたかたのですが、看護師さんは真面目ですから本当に胸が痛いのだと思って「大丈夫ですか」と言って駆け寄ってくるというようなエピソードを話されていました。本当に、常に人を楽しませ、笑わせることで人々を幸せにしてきた、そのようなお父さまの姿が具体的に浮かび上がってきます。私は一度も会ったことはありませんが、本当にいい方だったのだろうなと思って、今でもそのイメージを自分の記憶の中にとどめているわけです。

無名の人々の記憶

先ほど「イエスの死」に関する一節を読んでいたいただきました。われわれは誰もイエスに直接会ったことはないのですが、今ここでイエスについて語っているということは、イエスの記憶は受け継がれていることを示していると思います。私自身は、社会学にある専門的なテーマの中で、記憶の問題、特に「集合

的記憶」というふうに社会学では言うのですが、「個人の記憶だけではなく、社会そのものに記憶があって、それはどのように残されていくのか」ということについて研究しています。皆さんが教科書で習った歴史とは異なる、人々がなかば無意識のうちに残してきている記憶、これが「集合的記憶」なのですが、新約聖書は、イエスの生涯についての記憶の語りであるとも言え、この意味で、聖書は、イエスにまつわる集合的記憶の表現になっています。われわれが、いま、日本に生まれたわけではない宗教を通じて考え、そして聖書を読んでいるのは、こうした集合的記憶の輪がどんどん広がってきたからでしょう。

ここで強調しておきたいのは、打樋先生のお父さまの葬儀を通じて理解できるのは、イ

エスのような有名な人の場合だけではなく、そうではない無数の人たちの記憶も、実はずっと残り続けて、それで人間の社会は、続いていくのではないかということです。ですから、死そのものは何なのか分かりませんが、過去の人々の死を記憶することによって社会がつくられているということこそ、真実なのではないかというふうに思います。

それでは、これで春学期のチャペルは終わりですが、秋学期も、私もできるだけ参加するようにしますけれども、ぜひ皆さんにもチャペルに出席していただきたいと思います。これで、きょうのお話を終わらせていただきます。

(社会学部長・教授)